日本社会心理学会会報

203 号

発行　日本社会心理学会　http://www.socialpsychology.jp/
編集・制作　池田謙一
〒602-8580 京都市上京区新町通今出川上ル　同志社大学社会学部　池田研究室

2014 年 9 月 24 日

嵐を呼ぶ社会心理学会?!　第 55 回大会終わる

「Back to Basics」のテーマの下に夏の札幌で開催された今年度大会。北の大地の爽やかさを想像していたのにロシアの山火事で発生したという PM2.5 に煙る空には驚かされましたが,「普通じゃなかった」「非常に北大らしかった」と評判の, 密度の濃い 2 日間でした。1 週間かけてじっくり解凍されたスペイン直輸入ハモンセラーノの美味しさと共に，研究に関する情報交換と議論に浸った 2 日間をいつまでも懐かしく思い出すことでしょう。準備委員会およびスタッフの皆様，どうもありがとうございました。

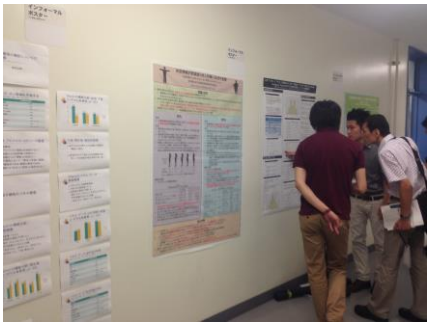
大会参加記 1

大坪庸介

日本社会心理学会第 55 回大会は，北海道大学で開催された。北海道での開催は 2004 年の北星学園大学での大会以来 10 年ぶり，北海道大学での開催は 1996 年の大会以来ということになる。実は 1996 年の大会では，学生スタッフであった。今度は，その北大での大会にお客様のように参加した。準備委員の先生方には，かつてお世話になった先生や, 当時一緒に学生スタッフだった先生もいらっしゃって, 自分が何もしないのが申し訳ない気分になった。また，20 年以上も前に自分が学生として学んだ教室での発表に不思議な気分にもなった。

今回は朝から夕方までびっしりとスケジュールが入り, とにかく 2 日間はしっかり学問に打ち込めという大会準備委員会のメッセージが伝わってきた。また，各発表時間帯の平行セッション数がワークショップも合わせて 4 つと少なめに設定されていたため, 行きたいセッションが重なって困るという問題が大幅に軽減されていた。同時に，各セッションのオーディエンスの数も例年より増えていたように思うので,「あのセッションと重なっていなかったら, あの先生にも発表を聞いてもらってコメントがもらえたかもしれないのに」という発表者側のもどかしさも軽減されていたのではないだろうか。

そのような学問的な真面目さの一方, ポスターセッション兼研究懇親会では数日前から某先生の研究室に保管されていたという生ハムもふるまわれる等, 遊び心に満ちたホスピティタリティも感じられた（実は大会前日の編集委員会のときに, 明日はこれを出しますよと写真を見せてもらった)。しかし，そんな生ハムにもまして私が密かに楽しみにしていたのはインフォーマル・ポスターであった。いったい，どんなやる気に満ちた人たちが飛び入りで研究発表をするのだろうと, 正式なポスター発表をされていた方には申し訳ないが，最初にインフォーマル・ポスターを見に行った。



インフォーマル・ポスターは正式な記録に残らないということだが，せっかくなので，私がお話を聞くことができたポスターをいくつか簡単にご紹介しておきたい。初日の夜には広島大学の清水裕士先生・平川真先生の間接的要求についての研究の話をうかがった。第 2 日目の午後には, 名古屋大学の佐名龍太先生・五十嵐祐先生の肥満ステレオタイプを扱った発表, 東京大学の伊藤言先生の道徳基盤理論から日本人の政治的イデオロギーを検討した発表, 京都大学の富永仁志先生らの合奏経験が注意と感情に与える影響を検討した発表などの話をうかがった。いずれも本来は他の学会で発表されるものや, 本格的な発表の前の準備段階にあるものなど, インフォーマルな場があったからこそうかがうことができたものであった。

今回，唯一平行セッションで大いに悩んだ時間があった。多くの参加者の方も同じ思いだったかもしれないが，2 日目の朝のキーノートである。下條先生の social brain のお話も聞きたいし，長谷川先生の思春期のお話も聞いてみたいと悩まれた方は少なくないのではないだろうか。

● 今号の主な内容

【1 面】第 55 回大会終わる（参加記：大坪庸介・武田美亜）
【2 面】第 55 回大会実施概要報告
【3 面】2014 年度学会賞選考結果（奨励論文賞：石黒格）
【4 面】夏の合宿セミナー報告（参加記：竹村幸祐・伊藤言）
【6 面】若手会員，声をあげる（番外編・野口聡一）
【9 面】第 28 期役員選挙のお知らせ
【9 面】会員異動

学会期間中は荒天で，野外ポスターという準備委員会の先生方の予定は変更を迫られることになったが，涼しいを通り越して雨で寒いという気温も，観光などに行かずに学会会場にとどまって真剣に学問しなさいという準備委員会の意図を期せずして後押しすることになっていたように思う。この場を借りて，このような素晴らしい大会を準備，運営してくださった北海道大学の先生方，ポスドク・学生スタッフの皆さんに心からお礼を申し上げます。ありがとうございました，そしてお疲れ様でした。

（おおつぼようすけ・神戸大学）

大会参加記 2

武田美亜

本大会はいくつもの新しい試みを実践した，確かに ambitious な大会だった。並行セッションは最大 4 つに絞られ，ポスター発表セッションは口頭発表等と重複しないよう 1 日目の夕方と 2 日目の昼に配置された。1 日目夜の有料懇親会を廃止し，1 日目夕方のポスターセッション中に飲み物と軽食を出して研究懇親会とした(2 日目昼のポスターセッションでも軽食が配布された)。

これらはいずれも素晴らしいご判断だったと思う。学会のたびに「分身の術を使えるようになるかコピーロボットがほしい」と悶々としていた多くの会員にとって福音だったに違いない。唯一残念だったことといえば，当初屋外会場を予定されていた研究懇親会が，雨天のため室内会場での開催となったことだ。せっかくならばぜひ青空ポスター発表を体験してみたかった……。

印象的だったセッションの 1 つは，多元的無知を切り口に規範研究を再検討するというテーマのワークショップだ。多元的無知の発端は自他の認知のずれという個人内過程だが，各個人がそのずれた認知に基づいて行動することによって，社会・集団レベルでは各個人の総和とは異なる選好の規範が表れうる。個人内過程がダイナミックに集団過程に関連する本ワークショップの話題提供および指定討論を聴いているうちに，個人内過程を主に扱う自分の研究と，今自分が見たいと思っている，政策への市民参加などマクロレベルの話とをどう関連づけられるか，いろいろな妄想もといアイディアが湧き上がってきて，フロアでにやにやしてしまった。

印象的だったセッションのもう 1 つは，思春期研究に関する長谷川眞理子先生のキーノートだ。成人ならば誰もが経験済みの思春期が，実はヒトに特有で，いかに不思議な期間であるかという話に引き込まれたことはもちろんだが，東京ティーンコホート研究の成功を支える，地道で濃やかな工夫に嘆息した。研究そのものの重要性を訴えたり内容をわかりやすく解説したりすることはもちろん必要だが，乱暴な言い方をすれば，それは研究者側にとって重要な点にすぎない。研究参加者は心理学の専門家や心理学専攻の大学生でなく，多様な背景を持つ市民の方々，9〜10 歳の子どもとその養育者。しかも 1 回きりの調査でなく，何年も継続して調査に回答してもらわねばならない。そのため，プロジェクトのロゴやホームページはカラフルに，見に来たくなるようなデザインにしつらえ，参加者向けの講演会，ニュースレターの発行，バースデーカードの送付などなど，研究そのもの以外の部分に，多大な工夫が詰め込まれている。こういうところで参加者の視点に立った工夫ができること（と，研究者が健康で長生きすること）が，研究の成功をも左右するのではないかと思う。

学会大会は，全国から専門家が集まって，心ゆくまでマニアックな研究の話ができる貴重な機会だが，いろいろな研究の問題意識を聴いていて，研究の背後にある「社会」をあらためて意識できる機会でもあった。開催校の方のご苦労は並大抵のものではないとお察しするが，なんとか来年の大会も無事開催されるよう願う。

（たけだみあ・青山学院女子短期大学）

第 55 回大会実施概要報告

期日：2014 年 7 月 26 日〜27 日

会場：北海道大学

準備委員長：亀田達也

事務局長：大沼進

1. 参加者数

616 名

（予約参加者数 467 名，当日参加者 149 名，うち，名誉会員 2 名，賛助会員 4 名）

2. 発表件数

キーノート 2 件

ワークショップ 6 件

口頭発表 124 件

（事前申込 129 件，プログラム公開前事前取消 2 件(11-03，25-04)，発表取消 3 件）

ポスター発表 255 件

（事前申込 259 件，発表取消 4 件）

＜発表取消者＞

口頭 07-05　竹内真純

口頭 15-04　曹陽

口頭 11-01　島田将喜

ポスターP110-01　江暉

ポスター138-03　亀川勇

ポスターP219-01　針原素子

ポスターP226-03　山岡あゆち

2014 年度日本社会心理学会賞　第 16 回選考結果のお知らせ

今年も例年にならった方法により論文賞および出版賞の選考が行われました。慎重に審議した結果，奨励論文賞として下記の論文が選出されました。なお，優秀論文賞ならびに出版賞については，本年度は該当なしとなりました。

■受賞論文

○奨励論文賞

石黒　格『社会心理学データに対する分位点回帰分析の適用:ネットワーク・サイズを例として』(第 29 巻 1 号掲載)

本論文は分位点回帰分析の有効性を検証したものである。従来の社会心理学研究で用いられてきた分析手法のほとんどは目的変数の分布の中心を分析するものであった。しかし，目的変数の変化は分布の形状の変化も伴うものであるため，扱うテーマによっては分布の中心に関心が集中することで，重要な情報が見落とされてしまう可能性がある。分位点回帰分析は，任意の複数のパーセンタイル点を分析のターゲットにできる分析法であり，これを用いることで平均値を用いた分析では見落とされがちであった新たな知見が得られる可能性がある。本論文ではネットワーク・サイズの分析を例としてこの可能性を検証し，分位点回帰分析の有効性を明らかにした。

このように，本論文は従来の社会心理学研究で用いられてきた分析手法の持つ技術的制約を分位点回帰分析によって克服できる可能性を示したものである。この手法は，社会心理学研究のみならず，広範な行動科学，社会科学のデータ分析にも応用可能である。したがって，本論文は関連諸領域に対しても有益な貢献をなす可能性を持つものであることから，奨励論文賞を授与するにふさわしい論文であると評価された。

○選考委員会

委員長：浦　光博

委員：

理事：安藤玲子，唐沢かおり，北村英哉，沼崎　誠，藤島喜嗣*，三浦麻子*

会員：秋山　学*，村上史朗*，安野智子（以上編集委員），脇本竜太郎（過去の受賞者）

*は出版賞選考小委員会委員

（文責：浦　光博・編集担当常任理事）

■受賞者の声

奨励論文賞を受賞して

石黒　格

このたびは，名誉ある賞をいただきまして，ありがとうございます。審査に関わった先生方に，深く感謝を申し上げます。

この論文は，分位点回帰分析と呼ばれる，経済学や生態学で用いられる技法が社会心理学者にとっても有用だと主張することと，その分析例を紹介することを目的としていました。統計解析は我々にとって大きな武器ですが，これまでに用いられてきた技法のほとんどは，分布の中心である平均値の変化を追い，分布の形状など，それ以外の要素は不変だと仮定して無視する性格を持ちます。これらの方法では，分布の中心についてしか手がかりを得られないのです。

この論文で問題視したのは，こうした方法に無自覚に依存するあまり，我々が理論的にも分布の中心しか見なくなっていることです。分布形状は不変のまま平均値だけが変化するというのは，あくまでも計算上の仮定にすぎません。しかし，このように仮定する理論的な根拠を，我々は持っていたでしょうか。ほとんどないはずです。それどころか，考えたこともないのではないでしょうか。それだけ，我々は平均値のみを対象とする分析法に依存しているのです。

しかし，私たちが関心を向けていたのは，そもそも「分布の真ん中辺の人たち」だけだったでしょうか。そこだけに，関心を縛られてよいのでしょうか。もっと自由に，柔軟に思考してもいいのではないでしょうか。

分位点回帰分析は，分布の中心という制約から，研究者を解き放ちます。任意の，複数の分位点（すなわちパーセンタイル）を予測する回帰式を推定するこの分析により，我々は，説明変数の効果による，分布形状の変化を検討できます。この分析法を前提とすれば，分布上の異なる位置について，異なる仮説を立て，検証することができるのです。今回の論文では，親密なネットワークのサイズに対する外向性の効果が，分布の上端近くで強くなることを理論的に予測し，実証しました。

分位点回帰分析は，我々の現象観察の解像度を大幅に高めます。このことのもたらす変化は劇的なもので（私は「革命」という言葉を使います），考え方を変えるのに苦労する方もいるでしょう。素直に白状しますと，私個人がこの技法を知ってから，分布の中心から離れた理論的予測を立てることができるまでに，５年もの時間がかかっています。とは言っても，私はもともと理論を立てるのが苦手ですから，ふだんから理論構築に慣れている皆さんなら，そこまで時間がかかるとは思っていません。それでも，最初は難しいと感じる方が多いはずです。

しかし，その難しさは，分位点回帰分析の利用が，社会心理学に関わるほとんどの分野で，前人未踏の領域に踏み込むことを可能にするがゆえのことです。なにしろ，分布の異なる領域に，異なる予測を立てることのできる理論は限られるのですから。前人未踏。胸が熱くなりませんか。この論文は，皆様に宛てた，未知への招待状です。私は，入り口でうろうろしているだけですが，未知へと分け入り，豊穣な新天地を見つける方が現れることを期待しています。そうなることが，私にとっての最大の報酬です。

（いしぐろいたる・弘前大学）

燃えた!! 夏の合宿セミナー

若手会員に「夢や元気を与える」場を作ることをコンセプトに企画された「夏の合宿セミナー」が，参加者 67 名を得て 2014 年 8 月 29 日・30 日に八王子セミナーハウスにて開催されました。特別講演（村山航氏・榊美知子氏）2 件，我と思わん「若手」会員が自らの研究成果や構想を語り，討論者・参加者と自由闊達に議論しあう分科会セミナー15 件，そして夜には委員会セッションと懇親会という盛りだくさんな内容が濃密に詰まった 2 日間でした。ここではその熱さをダイレクトに伝える参加記をお届けします。また，新規事業委員会メンバー渾身の力作「合宿セミナーのしおり」も学会 Web サイトに公開しておりますので，是非ご覧ください。

セミナー参加記 1

竹村幸祐

「大人げない」討論者（稲増，2014，会報 202 号）の一人として，合宿に参加いたしました。この指名は，この上ない名誉だと喜びました。一方で，思えば誰かに（偉そうに）コメントできる身じゃない，どうしよう，と不安を感じておりましたが，すぐにその不安も忘れました。発表者の皆さんの研究が刺激的で，質問・疑問・解釈（妄想）・言いたいことが，勝手に頭に浮かび，口をついて出てきたのです。討論者として，他の皆様にとっても有意義な場を作ることに一役買えたかは疑問ですが，刺激的な時間をいただいたことに，一研究者として感謝いたします。

合宿全体を通して，随所で感じたのは，「とにかく研究したい人間が，この合宿を企画・運営している」ことでした。合宿全体のスケジュール，講演・分科会の司会進行，その他随所で，「研究を進める」「議論をする」ことにこだわり抜いた企画者自身の志向が感じ取られました。それゆえに，集中力が切れることなく最後まで参加し続けることができたのだと感じています。今回の合宿の満足度の高さは，ひとえに，企画者自身の研究へのこだわりゆえだと考えます。新規事業委員会の皆様に，心からの敬意と感謝を表します。

「こだわり抜いた」と言えば，講演者お二人の研究でした。自分の研究に向き合う，そのあまりに真摯な姿勢に，我が身を振り返って「イテテっ」と胸が痛くなる思いでした（痛かったです）。自分の知りたいことは何なのか，いま明らかにするべきことは何なのか，それにアプローチするための方法は何なのか。安易にお手軽に歩むことを選ばず，こだわり抜く。そんなことは昔から言われ続けていることだけど，なかなか実践できない（これも昔から言われ続けていますね）。一人でこだわり抜けない半端者としては，他人の真摯な姿勢を見て自らの反省を促すのも一手。丸一日かけて合宿に参加した甲斐あって，自分に苛々することができました。遠くイギリスの地からお越しいただいた講演者お二人にも，心からの敬意と感謝を表します。

思い出深いエピソードを 2 つ紹介します。合宿 1 日目の夕刻の分科会だったと思います。そろそろエネルギーが切れかけていました。携帯用キャラメルを持参しなかったことを深く反省しつつ，その分科会の部屋に向かいました。すると，すでに部屋にいた皆さんが，何やら一様に口をもぐもぐさせている。そんな皆さんの目の前のテーブルには，黒い小さな包み紙がありました。ふと横の竹澤正哲さんの方を見ると，黒い飴が入っていそうな袋がある。「すみません，それ Public goods ですか？」などと言ってマイルドにせびった記憶があります（大人げないですね）。判明したのは，その部屋にいた参加者のおひとりが，持参した飴を皆さんに振る舞われていた，ということでした。こんな感動的なシーン，通常の学会ではついぞ見たことがありません。合宿という場ならではの，素晴らしい事態だと感動しつつ，おいしく頂きました。

2 つ目のエピソードは，とある発表中の発表者の振る舞いです。発表中も質問が活発に飛び，発表者は真摯にそれを受け止めて思考し，返答し，また発表に戻っていく…それが繰り返されていました。確か，研究 2 を紹介し終え，研究 3 の仮説を話そうとされていた時だったと思います。それまでに受けた質問・コメントを頭の中で咀嚼しながら話していた発表者が，フリーズしました。そして，「いや，これ（仮説）ダメですよね？」と自己否定を始めたのです。これも，学会ではついぞ見たことのないシーンです。そして，学会でこれを実践したら，アウトだろうと思います。学会では，入念に準備して仕上げた研究発表を手に舞台に立つことが求められます。しかし，あの場は「合宿」で，ディスカッションを重視する場でした。発表者以外の人間（討論者含む）もできる限りのインプットを行い，いわば新たな知を形成するための場。また，その発表者の準備が不足していたわけではないことも明らかでした。それ以前の質疑への応答から，その発表者が日頃から自分の研究に向き合い続けてきたことは十分にうかがえていました。その上でのフリーズ。あるいは，自分の研究に真摯だったからこそのフリーズ。そしてフリーズさえも許容する，場の雰囲気（竹村が雰囲気を誤読しただけ，という可能性は拒否します）。だから何だと言われると，これ以上の展開はありませんが，「研究を進める」ことだけにこだわったひとつの（珍妙な）結果が，あのフリーズだったと思えてなりません。改めて，合宿をデザインされた皆様と参加者の皆様に，敬意を覚えた次第です。

合宿がまた開催されたら参加するか，と言われたら，よく分かりません。参加するなら，自分自身の研究を進め，思考をもっと練り上げ，洗練させてから参加したい。それまでは…そう思わせてくれる合宿でした。

（たけむらこうすけ・滋賀大学）

セミナー参加記 2

伊藤言

とても贅沢で，ありがたい空間であった。興奮と疲労感が混濁した幸福感に包まれて帰途についた。去る 8 月 29 日から 30 日にかけて開催された，夏合宿セミナー。ひとことでいえば，参加して本当に良かった。感謝しきりです。再度開催されることがあれば，若手の方は是非参加し，研究発表をされることをおすすめします。研究発表を行った者の立場から，この夏合宿セミナーという，参加者以外にとっては謎に満ちたイベントの実態を，主観と言語で可能なかぎり再構成してみます。

8 月 29 日。八王子セミナーハウスという，想定していたほど陸の孤島ではない合宿所に若干重めの足取りで到着すると，まず村田光二先生の毒を含みつつしかし爽やかな，鼓舞するような開会挨拶が行われた。ただちに村山航先生の招待講演が行われた。1。研究者はつい特定の「学問領域」や特定の「方法論」からアプローチしがちだが，研究は知りたい「現象」から始まること（その「現象」に多様な方法論でアプローチすると研究が実り豊かになること），2。どの領域・場所に行っても，スキル（e.g., 統計・実験プログラム）は重要かつ重宝されるので，たとえば海外に出るなどした際に「言語の壁はスキルで乗り越え」られること，ゆえに自分の武器になるスキルを磨け！という重い Take Home Messages を受け取った。

村山先生の印象的な講演が終了した後，分科会セミナーが行われた。分科会セミナーは，約 80 分の枠の中で若手研究者が自らの研究を披露し叩いてもらうという素敵なセミナーである。3 枠あるタイムスロットのうち私の発表は 2 枠目だった。発表者の視点をこれ以上ないほど自動的に取得しつつ第 1 枠目のセッション（後藤さんの発表）で勉強させていただいた後に，私が発表担当者を務めるセッションがやってきた。

私は，解釈の抽象度（解釈レベル; e.g., Trope & Liberman, 2010）と社会的認知の関係について研究を行っている。わかりやすくいえば，物事を抽象的に考えたときと，具体的に考えたときで，人間の認知・行動にどのようなちがいが生じるのかに興味を持っている。現に，この原稿を書くときも，どれだけ具体的なエピソードを交えながら記述すべきか，それとも抽象的に要約した情報を記述すべきかを逡巡しつつ筆を進めているのだが，「抽象化＝複数の事象間に共通する不変項を取り出す営み＝汎化」は人間理解の根幹に関わる研究対象だと信じて研究を進めている。私が報告させていただいた，抽象/具体をマインドセットとして二分法的に比較する研究は限界を持つ（自己について解釈する場合と他者について解釈する場合で解釈レベルの社会的認知への影響は幅広く逆転するので，何が表象対象として想起されているかを踏まえながら研究すべき）という論点，ないしその論点を支える知見の頑健性は多くの方に受け入れていただけたと信じている。しかし，そもそも解釈レベル理論が前提とするような「抽象/具体」「心理的距離」という切り口が有効なものであるかどうかについて紛糾した。また，そのような切り口を用いて，社会心理学者以外に意味を持つ研究が可能かどうか竹澤先生から疑義を呈された（e.g.,「下條信輔先生がその話を聞いてなんて言うと思う？」）。これはまさに村山先生の講演の一つ目の論点の実地における反復であり，研究者はつい特定の「学問領域」（＝社会心理学）や特定の「方法論」（＝解釈レベル）からアプローチしがちだが，研究は知りたい「現象」から始まることを痛感させられた。この点を切迫感を伴って実感できたのは財産であり，その財産とは現在進行形の私の危機である。榊先生，竹村先生，石井先生，竹澤先生，そしてフロアの方々，貴重なご意見をどうもありがとうございました。

その後，夕食と入浴を済ませ，宴会場にて「海外に出よう」という名目でいくつかのトークが行われた。海外に出るに際して役立つ，通常はインフォーマルに伝達されるような知恵がフォーマルに披露されており，とても勉強になる素晴らしいトークであった。また，村田先生が相変わらず毒を含んだ爽やかなトーク（現在の大御所の若かりし頃の写真ショー）を披瀝してくださった。飲み会の場では，複数の方々に再度有意義なご指摘をいただいた。この場を借りて感謝を申し上げます。合宿の良いところは宴席に時間制限がないところで，第 2 ボタンが開き勇敢に露出された清水先生の素敵な胸元を眺めながら，空が明るむまでさまざまな議題について多くの方々と議論させていただきました。ありがとうございました。

8 月 30 日。朝食の後，榊美知子先生の招待講演が行われた。榊先生の問題意識の変遷に伴って，研究対象（感情と記憶）にアプローチする方法（認知心理学と神経科学）を柔軟に組み替えながら研究が展開していく様を時系列で描写してくださり，ライフヒストリーとしてもとても勉強になった。Take Home Message として，少なくとも個人内のミクロな過程を研究するのであれば，neural な表象にマッピングしやすい形で構成概念を考えていった方が研究を発展させやすいという点を受け取った。最後の分科会セミナー（稲葉さんの発表）にて進化アプローチの強みを再確認し，ディスカッサントと司会者の方々が異なると場の雰囲気がここまで変わるのかと驚きつつ，昼食，写真撮影，解散と進行していった。

学会とは異なり教育的配慮に満ちており，とはいえ厳然たる緊張感が張り詰めており，非常に貴重な機会でした。お忙しい中ご尽力いただきました新規事業委員会メンバーの方々（村田先生，石井先生，稲増先生，大江先生，清水先生，竹澤先生，橋本先生，藤島先生）にも御礼を申し上げます。これを読まれた若手研究者の方は，次回の機会に是非参加し，研究発表を行っていただきたく思います。みなさま，どうもありがとうございました。

（いとうげん・東京大学）

若手会員，声をあげる（番外編）

「若手会員，声をあげる」番外編として，『社会心理学研究』第 30 巻 1 号（2014 年 8 月刊行）で「宇宙空間における重力基準系は人にどのような影響を与えるか」が公刊された野口聡一さん（東京大学・JAXA 宇宙飛行士）のインタビューをお届けします。インタビューは 7 月 15 日に御茶ノ水の JAXA 東京事務所で行われ，野口氏とその共同研究者の木下冨雄，丸山慎の両氏，広報委員（小林哲郎・三浦麻子）の他に，朝日新聞社の記者が 2 名同席。朝日新聞の記事は 2014 年 9 月 9 日に紙面・Web 掲載（その 1，その 2）されました。

朝日新聞社提供

朝日新聞記者：野口さんが社会心理学という学問に目を向け，論文をものされるまでに至ったきっかけ，また，この研究テーマに関心を抱かれたきっかけを教えてください。

野口：人間，あるいは自分自身が宇宙に行く意味を捉え直し，客観的にいろんな人に理解してもらえるように再定義したいというのが出発点です。宇宙滞在というミッションにおいて，理工学・医学的な成果はもちろん重要なのですが，もう少し内面的変化を検討して，それに人文科学的な位置づけを与えたいと思ったんです。それを講演やインタビューで話すのでは，所詮旅行記というか主観的な思い，感想を伝えるに過ぎない。そこで終わってしまうのはあまりにもったいない。もう少し再構築するに足る経験なんじゃないかと考えたんです。そのために，例えば社会心理学であれば社会心理学の専門家から見たときに自分がやっていることをしっかり学術的に評価してもらえる形で世に問う，つまり，それぞれの学問の世界の手法を正確に活かして論文にまとめることが必要だと感じました。そうなるとやはり謙虚にそれぞれのスタイルに沿わないと載っけてもらえない（笑）。航空宇宙学の論文は何本も書いていますが，違うもんだなあと素直に思いました。どの学問でも客観性をいかに担保するかが重要なのは同じなんですが，目の付け所にそれぞれの学問ならではのユニークさがあって，それによってデータの考察に意味付けがなされていく。そのプロセスが本当に面白かったです。

さて今回の論文で扱ったテーマに関心を持ったきっかけですが，初めての宇宙滞在（2005 年 7～8 月に 15 日間にわたりスペースシャトル・ディスカバリー号に搭乗）で得た一つの体感として，無重力の世界で自分が基準にしているものは何かという根源的な問いがありました。「地に足を付けた」「肝が据わっている」という言葉があるとおり，我々は重力によって「安定した方向」を持っています。動かないことがもっとも「安定」であるわけですが，宇宙では動かないことはありえないわけです。動く速度は遅いですが，静止状態はありえない。しかし重力がなくなってみるとそれでも安定と感じるものはあるんです。それは何なのか，地球上とは異なる安定軸があるはずだ，というのが研究の発端でした。さらに，宗教的なもの，例えば神について考えてみると，こうした安定とは正反対というか，重力に反する，たどり着きにくい場所に位置しているんですよね。これについても，重力の影響がない世界に行ったときにどこに位置することになるんだろう，という疑問を抱いたのです。初回は短期滞在だったこともあり，宇宙空間にいる間はイベントをこなすので精一杯で，気がついたら地上に帰っていたという感じだったのですが，地球に戻ってきてから「あの時感じた絶対的な基準がない感覚ってこういうことなんじゃないかな」と省察したんです。2 回目までの間に，初回の体験の重みやそれによる内面的な変化を振り返り，再構成することができたわけです。

朝日新聞記者：いずれ長期滞在の機会があれば是非データをとってみたい，と思われたわけですね。

野口：はい。私は理系なので，数字しか考えていません。初回滞在中には，内面深くえぐって生き方を考えるというよりは次の作業をいかに正確に終わらせるかしか考えていなかった。ミッションが終わって初めて，理系的な思考から離れて宇宙に行くことの大きな意味を探ることに目が向きました。そのタイミングで木下先生のグループがなさっていた人文・社会科学的な研究の成果を知り，こういう観点で宇宙飛行というものを捉え直すことも大事なんじゃないかと思ったのです。「宇宙からの視座を手に入れた時に何が変わるのか，意味世界としての世界観が変わるとしたら何が一番影響するのか」を探求したくなりました。『認知科学』第 21 巻 1 号に論文が掲載された丸山慎先生との研究「宇宙で日常をつぶやく」では，宇宙で自分の発した言葉をテキストマイニングによって「読み直す」ことを試みましたが，これもその一例です。

朝日新聞記者：重力との絡みで，ご研究の中の「司令官との上下関係において位置取りの関係がなくなる」というエピソードが印象的でした。内面的な部分でも何か地上と違う関係が形成されたりしたのでしょうか。

(C) 宇宙航空研究開発機構（JAXA）

野口：それがこの研究の大きな重要なポイントの一つです。無重力になった時の人間関係の変化はおそらくいろんな形で出てくると思います。内面的という意味では，司令官は地上でも宇宙でも司令官ではあるのですが，関係性が何も変わらないわけではない。これはおそらく非常に掘り下げがいのあるテーマなのですが，現状ではちゃんと答えは出ていません。ただし，仮説はあります。我々は，地球上つまり重力があるところの基準系での上下関係と，宇宙という重力がないところの上下関係のように，違った基準系を同時に持つことがで

きて，テレビのチャンネルを変えるようにそれらを場面に応じて切り替えていくことができるのではないでしょうか。つまり，メタな上下関係というのはあって，それがどのような形で出現するかが状況に応じて変わるということです。例えば多国籍企業で似たようなことが起こっていると思うんです。外国人の部下は日本人の上司に向かって「Hi! Tomio!!」と話しかけるでしょうが，日本人は「やあ！冨雄！」とは絶対言わないですからね（一同笑）　でも，外国人には普通に「Hi! Tomio! What do you…?」みたいに話せるじゃないですか。そんな風に「正しい上下関係の表し方」を切り替えているわけです。おそらく地球上と宇宙でも同様に「正しい規範」が切り替わる。

(C) 宇宙航空研究開発機構（JAXA）

朝日新聞記者：宇宙滞在中のクルーの皆さんの集合写真を見て木下先生が「なんかおかしいんじゃないの？」とおっしゃったんですよね。

野口：はい。場面に応じた社会的規範の変容を研究される中で，無重力ならどうなんだ，と思われたんでしょう。これは宇宙飛行士会議などで尋ねてもみんな「別に変わらない」って言うんです。異口同音に「よそ（宇宙）でも同じだ」と。でも，まさにああいう写真で見せてみると，あ～確かにそういうこともあるよね，地上じゃ絶対こんな並び方しないよね，となる。しかし一方で，自分の国の偉い人との会見となると，宇宙空間でも地上の行動規範が呼び戻される。例えばロシアは上位階級に対する畏敬が非常に強い国ですから，ロシア人宇宙飛行士はプーチン氏と会見するとなると普段とは違う厳しさをもって臨んでいるのがひしひしと伝わってきました。そんなに気を遣う必要があるのか，と外国人からすると思うわけですが，かれらにはかれらの行動規範があるんだと思います。

朝日新聞記者：現場では自然にやっていたことが，帰って写真で見ると確かに違うなということがわかったというわけですね。

野口：それこそがこの研究の意義だと思います。現場ですべてを自覚的に見ていたんだったとすればそもそも研究する必要がないわけです。ある程度予想されていたことも，実際にデータとして見ないと気が付かなかったこともありますが，映像を動作解析して，その結果を解釈する際に社会心理学的視点を導入しました。他にも，議論スタイルの変化などに注目してみても面白いかもしれません。間違いなく何かあるだろうとは思うのですが，検証のためにはそれぞれの立ち位置や発言内容，発言の長さとなど多くのデータを収集・解析しなければならないので，なかなかまだ難しいですけどね。

木下：その問題について，共同研究者の立場から一言付け加えさせて下さい。宇宙飛行士たちが，宇宙空間と地球空間での行動様式に変わりはないといった問題です。これを理解して頂くには，行動様式(規範)には元型(genotype)としてのそれと，顕型(phenotype)としてのそれに違いがあることを知って頂く必要があります。元型とは言葉を換えると機能的な同型性，顕型とは形式的な同型性と読み替えて頂いても構いません。ところで宇宙飛行士たちが宇宙空間と地球空間とで行動様式に違いがないといったのは，それを元型としてのレベルで答えたからです。つまり指揮官に対する尊敬という機能的特性は，宇宙でも地球でも変わりないということです。ところがそれを顕型としてみると，宇宙と地球とでは大きく異なる。たとえば地球では，指揮官が部下と接する場合，中心的な位置から部下を統制する空間的位置取りをするのが普通です。指揮官が部下の足下に蹲った形で指揮するというのは想像できないでしょう。ところが宇宙空間ではそれが不自然ではないのです。つまり微少重力環境の元では，指揮官だからといってわざわざ中心的な位置取りをするのは物理的に大変困難だからです。行動様式の変化といっても，それを元型レベルで論じるのか，顕型レベルで論じるのかによって違うことがお分かりでしょう。同じことを卑近な例で言いますと，私たちが知り合いに出会ったとき挨拶をする規範がそうです。つまり相手に対する親愛の情を示すために挨拶をするという機能的な側面，つまり元型は通文化的で変わらないけれども，その表出という形式的な側面，すなわち顕型は，日本ではお辞儀という形で表出するのに欧米では握手という形になるというわけです。

三浦：phenotype と genotype の話，私もまさにその通りだなと思いました。社会心理学の典型的な公式として個人 person の要因と環境 environment 要因の交互作用で行動 behavior が決まるという考え方があります。社会的規範のお話も，規範というのは厳然とあって，それの表出のあり方が宇宙空間では地球上とは変わるということだと得心しました。我々が地球にいてもきっと体験できない環境の変化が宇宙にはあって，それが行動にもたらす影響はまさに典型的に社会心理学で扱うべき事象で，それを体験された貴重なケースなんだなと考えました。

野口：そうです。それを社会心理学の専門家は常識として知っているんですが，宇宙飛行士も含めて理系の人は知らないんです。だから，宇宙に行って何が変わるって重力が変わるだけでしょ，あとは普通に考え普通に行動し，普通の人間関係が行くだけだからって宇宙飛行士は今でもみんな言いますよ。重力は違うけど人間関係そのものは一緒なんだから，そこは変わんないんじゃないの，っていうのが多分素直な反応です。だから，先程おっしゃったような「環境が違えば行動も変わる」という考え方は，理系の世界ではまったく共有されてないと思います。お互いに違う世界でそれぞれの知見が共有されていないことは数多くあるので，私たちの研究が一つの懸け橋，突破口になると良いなと思っています。

小林：このご研究は社会心理学にとってとても画期的だと思います。今後こうした宇宙社会心理学，つまり宇宙空間における人間を対象とした人文・社会科学的な研究を進めるため，もっと簡単に言うと，データをたくさん取るためには，どういうアプロ

ーチが必要になるとお考えですか？先程もおっしゃったように理系中心の社会なのであまり文系的な関心は高くないとのことですし，あるいはサンプルの問題としても，例えばコマンダーが下にいてもあまり気にならないというのは宇宙飛行士という訓練された人たちだからこそ許容できたのかもしれません。一般の人たちが宇宙旅行をするようになると，おい，なんでお前が俺の上で寝てるんだ，みたいな話が出てくるかもしれませんよね。科学としてさらに一歩進むためにはそういった点の検討が必要で，そのためにはまずデータの蓄積が求められるのではないでしょうか。今後の発展のために，研究者側からのアプローチとしてどんなことが必要だとお考えですか。

野口：まずは，JAXA としても多くの他の宇宙飛行士からいろんな意見をもらえるようにしようということになっています。一部の鍛えられた宇宙飛行士だけ見てもしょうがないというものまさにおっしゃる通りで，これから大勢の人が宇宙に行く時代に変わっていくという前提でそのための準備を始めて，有人宇宙飛行の意味が，理系だけではなく人文・社会科学的な価値観からも注目されていること，大事なんだということをアピールしたいと考えています。多くの人たちが「人間が宇宙に行く」ということを「自分のもの」として捉えるためには，人文・社会科学的な研究の果たす役割は重要だと思います。

木下：小林さんの疑問はもっともだと思います。私が国際高等研で 10 年ほど前から JAXA と共同研究を始めたのも，同じ問題意識があったからです。つまりこれまでの宇宙空間への進出は，宇宙飛行士というプロしか参加できなかった，またそこで行われた研究も全て自然科学のそれであった。宇宙プロジェクトの初期段階はそれで良いと思うのですが，最近になって事態が少し変わってきた。宇宙へ行くリスクが減りコストも下がってきたのです。民間人が宇宙に進出する機運が出てきたというべきでしょう。そうするとそこで何が起こるか。おそらく素人の民間人が中心となった「宇宙コロニー」とでもいうべきコミュニティができるだろう。そこでは必然的に新しい社会が生まれ新しい文化が発生し，それを統治するガバナンスシステムが必要となる。それを私たちが設計しようということで研究を始めたのです。これはまさに学際的な研究でさまざまな分野の方が参加して下さったのですが，社会心理学者は私一人でした。まさに孤軍奮闘です。そこへ野口さんという強力な相棒が参加して下さった訳です。でもまだまだ数が足りません。そこで九大の山口さんや東大の村本さんなど，かねて規範の共同研究をしていた仲間に声をかけ，人数が少し増えてきました。人数が多いから良い研究ができるとは限りませんが，少ないと議論のぶつけ合いができないし，データの収集も難しいですものね。どなたか参加して下さる方が増えると嬉しいのですが。

小林：宇宙について考える時は「重力」が一つ大きなポイントになるとのことでしたが，その他の環境的な変化として，例えば空気があること自体が当たり前じゃないとか，太陽の見え方が地球からのものとは違って東から上って西に沈むというサイクルじゃないとか，地球が見えるとかもありますよね。そういう変化の影響も感じられることがありましたか？

(C) 宇宙航空研究開発機構（JAXA）

野口：はい。僕自身が大きいと思っているのは，地球を外から見ることの影響です。いわゆるブルーマーブルっていう丸い地球を人類が見たのはせいぜい 60 年ぐらいの話なんです。それより以前は想像でしかなかった「丸い地球」がその時点から事実になって，地球的な視座というのが間接的に入ってきて，宇宙飛行士はそれを目の前で見た。そういう意味でまさに価値の相対化ですよね。地球にいたら大きすぎて見えない，常に接しているけど実物が見えないものが実体化してあるわけですから。同様に，神も見えません。どこにいるかわからない。地球も大きすぎてどこにいるかわからない。神様は天上にいて地球は足元にいつも寝転がっているので上下関係はまったく逆ですが，一番生命にとって価値があって，大きくて，全てを解放している地球も，神のような存在ではないでしょうか。それを目の前で見るという体験は得難いものだと思います。

木下：地球の外から地球を見るという「相対化」の視点は極めて重要です。事実，宇宙飛行士は宇宙から地球を見てそのあまりの美しさに感動し，かけがえのない青い星の尊さに打ちのめされるようです。この相対化が進むと，地球上で行われている醜い争い，例えば資源争奪戦争，国境を巡る争い，民族や国家間の葛藤といったエゴイズムがなんとくだらない出来事かということになるでしょう。地球を相対化することはこのような効果を生むのです。私たちは自国中心主義を脱するために「国際人」になれという言い方をしますが，これをさらに進めれば，「宇宙人」になれと言えるのではないでしょうか。それを実現するために，国連の安保理事会や各種の委員会を宇宙で開催せよと私は前から主張しています。今回の学会誌には書きませんでしたが。ただ厳密に言えばこの議論が成立するのは地球が見える近宇宙でのことであって，深宇宙へ出かけて地球が見えない深黒の闇になり，基準型が失われた世界ではどうなるのか，議論を進めているのですがまだ解を持っていません。それともう一つ気づいて頂きたいのは，宇宙に進出することによって宇宙の理解が進むだけではなく，地球の理解が進むということです。というのは，宇宙に行くことによって，これまで地球上では当たり前だと思われていた行動のいかに多くが，重力の影響の元に存在していたかが理解できるからです。たとえば二足歩行，静座という行動は宇宙では不可能です。でもそんなことは地球では気付かないのではないですか。古典力学の運動方程式の中から g の項を抜いた世界です。

次のミッションはいつ頃になりそうですか。今後の研究の展望をお聞かせください。

野口：我々宇宙飛行士は順番に地上職を経験してまた飛んでといったプロセスで任務に就いています。現在の私は，宇宙飛行

士の新人たちの世話などについて日本側の取りまとめをやっていまが，時期を見てまた現役に戻るつもりです。宇宙ステーションになるのかその周りの星になるのかわかりませんが，頑張りたいと思っています。その際は，今回こういう形で論文をまとめた経験を活かしたいですね。この論文も，木下先生からいただいたアイディアを起点としてここまで話が広げることができたわけです。今は当時と比べるとかなりいろんな分野の先生方とやりとりしていますので，少し違った展開もあるかもしれません。宇宙開発において理工学や医学的な研究はもちろん重要ですが，人文・社会科学的な観点，心理学以外にも人類学や言語学などから，人類の大きな変化として宇宙滞在を捉える研究を大事にしたいと思っています。宇宙飛行士は人数もいますしさまざまな経験をしているので，研究対象としても使い勝手がいいと思います。是非いろいろな先生方とコラボしながら，それぞれの立場から宇宙体験が人間に与える変化に関する知見を出していければ，宇宙大航海時代に向かう上でいい準備になるんじゃないかと思っています。

朝日新聞社提供

事務局から　第 28 期役員選挙のお知らせ

役員選挙は今回から 2 ヶ月ほど時期を早めて実施することになりました。すでに 9 月の半ばに，この選挙の台帳となる選挙権および被選挙権を有する会員の一覧表をすべての会員にお送りしました。ご自分の記載について内容に誤りがないか必ずご確認くださり，修正がございましたら，9 月 29 日までに事務局(jssp-post@bunken.co.jp)までご連絡くださるようお願いします。

この選挙の投票は 11 月 4 日から 11 月 28 日を予定しています。9 月 29 日までに書面投票を申請されていない方はウェブ投票となります。11 月 4 日までにメール等で投票方法等をご案内する予定です。ぜひ投票くださるようお願いします。

＊　＊　＊　＊

会員異動

新入会員（2014 年 6 月 11 日～2014 年 9 月 18 日）

《正会員》

・一般会員

工藤　亘（玉川大学教育学部教育学科准教授），立花知香（安田女子短期大学秘書科准教授）

・大学院生

梅野利奈（目白大学大学院心理学研究科），木村祥子（名古屋大学大学院環境学研究科），小松真理子（広島大学大学院総合科学研究科），櫻井隆充（慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科），本元小百合（関西大学大学院心理学研究科），正高杜夫（大阪大学大学院人間科学研究科），町田奈緒子（京都大学大学院人間・環境学研究科）

退会

大田　稔，福田詩織

所属変更

岬　里美（慶應義塾大学日本語・日本文化教育センター），鈴木文月（木の花クリニックカウンセラー），田淵　創（常磐会短期大学学長），赤澤淳子（福山大学教授），依藤佳世（公益社団法人国際経済労働研究所），平井　啓（大阪大学未来戦略機構次世代研究型総合大学研究室），菅原紘子（信州大学総合健康安全センター），渡辺忠温（中国人民大学），佐藤史緒（立教大学現代心理学部教育研究コーディネーター），佐藤剛介（学生相談総合センター特任講師），白岩祐子（東京大学大学総合教育研究センター特任助教），間々田理彦（愛媛大学農学部），杉浦仁美（広島大学学術･社会産学連携室研究企画室 URA），郡司郁子（(独）日本原子力研究開発機構那珂核融合研究所），大崎裕子（成蹊大学アジア太平洋研究センター特別研究員），朴　喜静（Scientific Investigation Section, Daegu Metropolitan Police Agency），小川祐樹（立正大学助教），吉野優香（筑波大学大学院人間総合科学研究科）

編集後記

今号は野口聡一氏インタビューを掲載しました。朝日新聞の記事をご覧下さった方もあるかもしれませんが，そこで尽くせなかった意を尽くした内容です。宇宙で「上下」関係がなくなってしまうわけではなく，重力のない環境では「上」と「下」という物理的位置にそれが表象されなくなる，というきわめて社会心理学的な事象が生じた，ということです。　(asarin)

メール・ニュースの広告募集

日本社会心理学会メール・ニュースに掲載する広告を随時募集しております。掲載を希望される方は，日本社会心理学会事務局までご連絡ください。

E-mail：　jssp-post@bunken.co.jp

掲載料：1 件（1 回あたり）1,000 円(後日事務局より請求書をお送りします。)